第３回まちづくり有識者会議　会議録

○日　　時　　平成３１年1月２４日（木）１５：３０～１７：４０
○場　　所　　小国町役場　３階　庁議室
○出 席 者　　【まちづくり有識者会議　委員】
　　岡﨑昌之委員（座長）、朝倉はるみ委員、図司直也委員
　　【小国町】
　　町長、副町長、総務企画課長、企画財政室長、政策企画担当係長、
　　木村主任
○内　　容
　政策企画担当係長より、第５次小国町総合計画基本構想の案について説明し、各委員から意見をいただいた。

岡﨑座長：目次の部分について、基本構想の全体構造はこれでよろしいか。これまでの会議でご意見を頂きこのような形に落ち着いたが、違和感等無いかどうか。各章を順次ご確認いただきたい。
　第１章では図表や写真が多く使用されることで、見やすくなってきた。今後の予定として、基本構想そのものを冊子にし、職員はもとより全戸配布など考えているのか。

事務局：職員や行政関係機関には、この形での配布を考えている。前回の有識者会議や、先般の振興審議会でも意見を頂いたが、この内容を読み込むのは大変である。そのため、町民の方々に対してはイラスト等でわかりやすく表現した概要版を作り、配布したいと考えている。体裁上はもう少しきれいにしたい。

岡﨑座長：総合計画は、誰がどれくらいの関心をもって読んでくれるかが重要。なるべく楽しく読んでもらえるが大事。その点から他にわかりにくい部分はないか。

図司委員：町民の方々の声を聞いていったことを順次並べたと思うが、町民の声を示す目的から考えると、見えた結果を総合的にまとめた方が読みやすく、もう少しコンパクトにまとめた方が良い印象がある。構想自体のメインは後半だが、前半が重い印象。結果を集約して傾向を拾った方が結果的には見やすくなると思う。まとめ方を検討していただきたい。

岡﨑座長：導入部でスペースと時間を取られている。見やすくするため図表をいくつか入れたが、３ページの下と５ページの上は、同じような内容の表であり、２つは必要ない

のではないか。

朝倉委員：データをもって現状を理解してもらうことは大切。現在の形で悪くはないが、グラフは参考資料として後ろに付けて、アンケートや座談会を踏まえた上で、町の問題を整理するという方法もある。第１章第１節は、「はじめに」という形にしてまとめても良いかと思う。住民の方々の意見をきちんと捉えた上での整理を最初にもってきた方が、住民側も自分たちの事として捉えるのではないか。

岡﨑座長：３ページから７ページにかけてかなりボリュームがあるので、第３節の繋がりが見えにくくなっている感じがする。４ページの写真も４枚すべて掲載は必要ないのではないか。全体のボリュームやページをつめて、全体のバランスの中でもう少しコンパクトにまとめる方が良い。

事務局：最初は、関係する調査や座談会のタイトルなどを記載しただけであったが、それではわかりづらいという意見もあり、少し加工した経緯がある。３ページから７ページにかけて、分量的にバランスが悪いのでコンパクトにしたい。

岡﨑座長：住民が全段階で策定に参画してきた経緯を入れて、住民の方々との対話の中で計画を考えてきたということは削除しない方がいい。

町長：住民参加型を前面にわかりやすく出すと、見る側も参加が活かされている意識に繋がる。予算に関しても、「わかりやすい予算書」を作成し、町民の方が理解しやすいようにしている。

副町長：前段には町長の「策定にあたって」の部分をつけたいと思う。振興審議会等、策定の経緯についても後ろで補完しなければならない。資料のボリュームがある部分をどのように取り扱うか検討したい。

岡﨑座長：第２章についてはどうか。

朝倉委員：１０ページの１行目は「雪国山村の小国町」とあるが、他は「白い森」という表現になっているので、言葉を統一した方が良いのではないか。「雪国山村」は小国をよく表している言葉であり、この条件の下でどうまちづくりをするかという計画であるので、この後も上手に使うと、住民も意識しながら構想を読んでくれるのではないか。住民向けと観光客向けのキャッチフレーズを使い分けた方が理解されやすいのではないか。

また、１０ページの２段落目の「集落活動」は、他の章で「コミュニティ活動」とい

う表現もあるので、カタカナをあまり使わず書いた方が良いのでは。

岡﨑座長：「白い森」は小国町として外せないワードだ。一方、「雪国山村」も今の情景にふさわしい。

朝倉委員：全体的に言葉使いを統一した方が良い。

岡﨑座長：「集落活動」から１８ページ以降「コミュニティ活動」となっている。

朝倉委員：「集落」は地元の方が常に使う言葉であれば「集落活動」とした方がわかりやすい。

岡﨑座長：中心部でも「集落」は普遍的に使う言葉か。

事務局：町では「部落」という言葉を使っているが、差別的な意味を有する地域もあることから、対外的にはふさわしくない表現であるため「集落活動」としている。「コミュニティ活動」は、学校区などのもう少し広がった地域での活動を意味している。町民には馴染みが薄いかもしれないが、「集落」や「コミュニティ」を使った。

岡﨑座長：意識して使い分けていると解釈した。１０ページの地域運営組織の図と１３ページの AI の図は読みにくい。住民に関心を持ってもらえないのではないか。

図司委員：町内のどこかの地域運営組織の例をポンチ絵にして、そこに写真を加えながら表現してはどうか。ＩｏＴもベースはこの図の通りだが、草刈りロボットや福祉分野での活用などのイメージ写真などを載せることで、内容がわかりやすいのではないか。小国の暮らしの中に入り込むような雰囲気、小国に添う内容の写真などがあった方が良い。

岡﨑座長：基本的に国が示した図等は、あくまでモデル的なものなので、小国町の基本構想に入れる事に違和感がある。山形県小国町の基本構想は、国が提示するものの先を提示するという気概があった方が良い。そういう点も含めて、この２つの図の扱いは考えてほしい。

朝倉委員：地域運営組織とは自治会、消防団などのことか。または、そういうものを超えた大きなものか。

岡﨑座長：色々なタイプがあると思う。小学校区単位で運営組織を株式会社化したような

ものや、もっと小さい公民館レベルで運営しているものなど、形成は様々だと思う。

朝倉委員：地域の消防団などを束ねる地域運営組織が必要、というのでも良いのではないか。国の政策と市町村レベルは乖離する部分がある。現在の小国にあるものをまとめるイメージの方がよりわかりやすいと思う。

岡﨑座長：以前、集落組織の新しいあり方を調査した際、小国町の旧来の集落組織を新しく読み替えると、こういう組織に読めるのではないかといった、これこそこれからの新しいコミュニティ組織だというチャート図を作ったものがあった。

事務局：叶水小中学校区単位の東部地区振興協議会は様々な組織を融合し、地区全体でまわしていく取り組みを先駆的に行った。農林水産祭の村づくり部門で天皇杯を受賞した。現在も組織は継続している。単一の集落でも、役割分担し組織化していって、賞をいただいた事例がある。柔らかい絵に出来るかどうかわかならないが、以前のチャート図も参考にしながら考えていきたい。

岡﨑座長：東部地区を例にすれば、小国の住民も理解しやすいかもしれない。東部地区の写真は１２ページにもあるので、上手くバランスを取りながら、他の地区もちりばめられるといい。

１３ページは色々詰め込んでいる印象で読み切れないかもしれない。

１２ページの上の写真は防災訓練と一目でわかるか。

事務局：白沼地区で行っている。通常の防災訓練は、消防署員に初期消火の訓練を受けたりするものであるが、楽しむと言う観点から地区運動会のレクリエーションに変えつつ工夫したもの。２つの集落が融合し取り組んでいる。

岡﨑座長：取り組みは面白いが、もう少し分かり易い写真はないか。第２章はもう少し手を加えなければいけない。

９ページの下の図表は、赤、青の線と棒グラフが何を意味するかわからない。

朝倉委員：図表のタイトルは上にあった方がいいのではないか。人間の目は上から下へ動くので、個人的にはその方がわかりやすく感じる。

岡﨑座長：第３章はいかがか。第２節別紙案は後で良いか。

朝倉委員：将来人口は「定住人口」に「協働人口」を含めたものであるが、内訳はあえて

書かないのか。

副町長：人口議論はいくつかあるが、今までは住民基本台帳をベースにしている。つぎの地域づくりはそれだけでは難しい。住民票を移さなくても、小国の企業や事業所で働いている人、観光に来た人など、そこから生まれるサービスや様々な賑わいが出てくれば、それは町が目指す部分。住基の人口で見れば、学生などは住民票を移さずに町外へ出ている。活動の母体があるところに次のまちづくりへシフトし、どのような施策展開が出来るのか。７年という短い期間での計画なので、こういった考えでいきたい。

町長：人口については大分議論したが、社人研の数値でいけば町は消滅する。単純な値ではそうだが、町の在り方として一番大きいのは企業。企業を維持すれば関係する人口は減少しない。最終的には４，５００人から５，０００人が歯止めだと考えている。そこから考えれば、人口が指すものは協働人口だ。情報発信、観光部分では交流人口も出てくるが、町の将来を計画する場合には協働人口が枠になる。

岡﨑座長：単に定住人口増加の議論だけではなく、小国に心を寄せてくれる人、住民票は移さなくても小国で活動してくれている人をきちんと含み、人口とすることが重要。

前回の計画で協働人口という言葉を創った。関係人口よりもう少し絞り込んだ意味で、より小国町に思い入れのある「協働人口」を含めて考えることは良いと思う。

ただ、全体の人口として７，０００人と具体的な数字を出してしまうと、９ページの表から協働人口の数が出てきてしまう。

副町長：具体的に数値を記述するかどうかだ。

朝倉委員：小国町での活動とは何をすることなのかよくわからない。地域に居住しながら小国町に働きに来る人、働かなくとも一定期間小国に暮らす人。２地域居住もあまり一般的ではないので、理解の為に注釈があれば良いのではないか。観光客は入らないのか。

町長：協働人口として考えているイメージは、もう少し関わりが強い人のこと。今の感覚としては１，０００人くらい。増やしていかなくてはいけない。

副町長：国勢調査の昼間人口は 100 人くらい。現在は減少しており、そこに関わりを増やしていくことが必要。現在企業体が好調なので、企業体の中での異動がある。その人たちが地域の消費活動を担っている部分がある。そこを見ながら応援団をどのように抱き込んでいくか。まちづくりの原点に人口があるとすれば、そこを含めなければまちづくりは難しいと整理したい。

図司委員：人口の目標値を出した方が良いのか、考え方を示した方が良いのかで、書きぶりが変わってくる。定住人口をベースとした上で、昼間人口の関わりをもう少し太くして、目標値にいくか、それを促すかなのだと思う。

岡﨑座長：総合戦略の人口ビジョンには２０２５年までの定住人口が出されていて、７，３００人となっている。今回は協働人口も含めてもそれより低く設定するのか。

事務局：その当時は統計値より高めに見積もったが、現実的に減少しており、最新の人口推計でいくと６，０００人くらいになる。状況の変化で数値が下がってしまっている。

副町長：以前は人口１万人にこだわり数字を掲げていたが、現実的には難しい。ある程度実行可能な総合戦略を唱えなければならず、数値的につり上げ７，３００人にした。実際の数値の積み上げとしては現実的なしっかりしたものではない。実態は６，５００人から７，０００人だと思う。

岡﨑座長：社人研の推計では２０２５年の人口が６，０５９人となっており、同じ構想の中に出ているから１４ページとはすぐに比較出来る。これまで小国の将来人口で関心を持ってきた人は、地方創生の人口ビジョンでは相違があると思うのではないか。

町長：企業人から見れば人口１万人復活の展望はあり得ない。具体的な施策と可能性があれば良いが、単純に書いたものだけでは理解出来ない。現在は、５，０００人になってもいきいきと暮らせるまちづくりを提唱している。高齢化率も上がっているので、中核の企業を中心にしながら、働ける人は観光を含めあまり重勤労働ではない仕事ができるまちづくりの形も作っていきたい。今後２０年も経てば、施策も定着するであろうと考えている。人口減少に関しては、町民も認識している。

岡﨑座長：協働人口を含めて７，０００人と書いてしまうと、行政の一貫性はどうなのかとの疑問が出る。協働人口１，０００人と書けば問題は無いのではないか。

副町長：具体的な数字の書き込みをしないで、将来人口の考え方として説明を整理する方法もある。人口については前段でも数値を出している。

岡﨑座長：前回東京で打ち合わせをした際の案では、将来人口７，０００人と記載されており、将来人口としてはそれで良いと思う。総合戦略ではそのように推計してきた。今回は少し厳しく想定することについては納得できるが、協働人口も含めて７，０００人

という数字を出して、９ページに戻れば社人研の推計値が出てしまうことは、基本構想としては少し細かいところまで、足を踏み込んでいるのではないかと思う。

町長：数字を出さず、協働、交流人口を増やすというような言い回しにした方が良いか。

副町長：第３節は将来人口になっているが、将来人口の考え方という見出しにして、解説をわかりやすく書き、協働人口を大事にしながら定住人口を減らさないように努力する部分を、どのように書き込むか。

朝倉委員：将来人口の考え方の中で、今後２０年間の小国の人口はこうなると書いた上で、まずは定住人口を減らさない、加えて協働人口をきちんと確保していくと言う書き方にすれば良いと思う。総合戦略ではこの数値だが、状況を鑑みると目標は変えざるを得ないとしたほうが良いのではないか。

岡﨑座長：そこまで詳しく書かなくても良いのではないか。前回読んだものは違和感が無かったが、その間に協働人口論のようなことが入っている。協働人口はどれぐらいのことを考えているのか。普通は、関係人口や協働人口は非常にアバウトな数字なので、実際には具体的に出さない数字だ。不明確だが小国町としてはそれをシビアに考え、施策を考えると言うのも１つのやり方だと思う。

事務局：冒頭、「協働人口」か「定住人口」かについては特段触れていない。

町長：人口とは何を指しているかと言うところで、協働人口を含めた数が一番良いと言う議論をした。

岡﨑座長：東京での会議のものは、文面から協働人口を含めた意味のものではない。

事務局：当初は定住人口が前提という考え方であった。

岡﨑座長：７，０００人という数字を出すのは、構想としてはどうか。

町長：人口も沢山の意味合いのものがあるので、何を指しての７，０００人かわかりにくいということで、現在の流れから協働人口を含めるのがふさわしいと考え、そのように定義することとした。

岡﨑座長：社人研の人口推計では、２０１５年の国勢調査の結果が出たとき、全国的にや

や上向いた。７，０００人は小国町独自で目標にして頑張るとするのであれば違和感がない。

町長：増やすという施策を取っているが、具体策を考え突き詰めても当面そこまで増えない。現在外国人労働者の家族も含めて婚活を考え、中小企業には女性の採用をお願いしている。数年後には出生率に影響するであろう。一方亡くなる方も年間１８０人ほどいる。出生率から差し引いても、単純計算で毎年１５０人減少する。

岡﨑座長：計画論として気に掛かるのは、協働人口という言葉が、社会的に定義されていないことである。

町長：町に来て、様々なビジネス活動などで町が活性化してくれば、人口も増えると言う前提で１，０００人としているが、これも予想でしかない。

朝倉委員：自分の町だけ人口が増加するのではないかという、甘い期待を書いてしまうところが多い。小国は人口を増やすことは無理だとはっきりわかっているので、１４ページの最後、「減少の抑制」を行うことを前提に、さらにそれを補う形で協働人口の確保にチャレンジするという、二段階に分けて書いた方が良い。ここで協働人口の数字は出さなくとも良いのではないか。出すのであれば差し引きをして、約１，０００人と大まかな数字を入れておけば大丈夫なのではないか。

副町長：まちづくりの人口の考え方は具体的な数字を表現しないで、まちづくりの原動力になる人口という捉え方で整理をした方が良いと思う。人口が減少することは社人研に出ているので、それは認める。

町長：人口減少の抑制を全面に出すしかない。

副町長：人口減少を抑制する施策の展開をするとしたい。

朝倉委員：１５ページの体系図に 「ずっと住み続けたいまち」と「何度も訪れたいまち」とあるが、観光については前段で一切触れられていないので、後者は少し唐突な印象がある。協働人口について表す文言に変えた方が良いのではないか。

岡﨑座長：「何度も訪れたいまち」は、協働人口のイメージも含んでいるのか。

事務局：含んでいる。

朝倉委員：これだと観光客のことと思ってしまう。定住人口と協働人口が小国を支える土台なので、協働人口を表す表現に変えた方が良いのではないか。

岡﨑座長：第４章についてはどうか。

図司委員：１８ページ第３節で、「暮らし」と「産業」について、第２節では「暮らし」と「産業」がイーブンになっているが、第３節は「暮らし」が上にありその下に「産業」がぶら下がるイメージになっており、違和感がある。「暮らしと仕事」は並ぶ感じだが、「産業」となると一段大きなイメージがする。町民の方々のレベル感だと「暮らしと仕事」だと思う。地域全体だと「産業」になるが、言葉の並び方がしっくりきにくい。

岡﨑座長：第３節の１、そこに「産業」が出ることに違和感があると言うことか。

図司委員：「産業と観光」の話が出てくるので。

朝倉委員：第３節は「観光産業」にしたい。観光は範囲が広い。総合産業でもあるが、地域資源を活かした新しい観光産業など、これまでとは違う観光客を取り込みたい、活動を提供したいということなので、これで稼げるというような認識をしていただけると良い。働く人のみならず、外から来る観光客を増やすこと、観光産業に関わることで、住民の生活の安定を図ることが大切だと思う。「観光産業」が第２節に入るか、第３節に入るか検討いただきたい。

副町長：第２節の３はインフラ整備についての記載であり、産業振興は第３節だが、少し表現の仕方を変えたい。

岡﨑座長：１７ページの第２節の３は社会インフラの整備がメインなので、ここはこのままで良い。新しい観光は一般的なツーリズムではなく、協働人口、交流などを含めた場を創出していくことを言いたいのではないか。観光産業と言ってしまうと、ここでは少し狭いイメージになる。

朝倉委員：観光と交流は違う印象になってしまう。観光客という言い方も、交流客という言い方もある。ここはいきいきとした暮らしづくりのことを指すものか。

副町長：暮らすためには稼がなければいけない。背後にある産業を活性化させていこうという意味。

朝倉委員：地域資源を活かした産業にはこういうものがあって、その中の１つに観光を位置づけるという書き方はどうか。

岡﨑座長：第３節の１の前段は、資源を活かした第１次から第３次産業までのことを扱い、後段では新しい観光ということを解説している。観光業、協働人口に関連する交流事業を２段目で説明している。加えて新しく設立する地域総合商社を説明している。

朝倉委員：地域総合商社は観光だけではないのか。

副町長：観光だけではない。

岡﨑座長：産品の開発もある。

朝倉委員：地域産業を活かした稼ぐ力の導線として、あえてここで観光を取り上げなくとも良いと思う。定住人口、協働人口にプラスする第３の人口として観光客が必要だという記載がどこかにあれば、ここに観光が出ても収まりが良いのではないか。いろいろな地域の資源を活かしての農林漁業、商業、観光業の書き方にし、稼ぐ力を向上させるために地域総合商社を、と繋がるのであれば問題は無いのではないか。

岡﨑座長：当初の案は、地域資源を活かした観光と産業の創生としていた。議論したが、観光だけだとインバウンドのようなイメージへ偏っていく。新しい観光を目指し、幅広い交流を含めた、交流人口の基盤となる産業を創ろうということで、当初は観光という言葉を取ろうかと思っていたが、観光を使った方が住民にもわかりやすい。そこで「新しい観光」とした。

図司委員：第３節の１は「産業」が大きいイメージがする。第２節と第３節は、一人一人のレベルの話をしているのだが、「暮らし」が先にきて後から「産業」では違和感がある。行政は「産業振興」となると思うが。

副町長：仕事づくりと新しい観光の創生という形で、観光と産業をトーンダウンした感じで置き換えたい。

岡﨑座長：小国町には大きなハイテク企業があるが、それは単なる「稼ぐ力」というのを超えている。それを抱える町だとイメージすると、「産業」と書いても良い気がする。これは私たちの意見とし、扱いは町長以下にお任せする。

朝倉委員：１８ページの第３節「地域が輝き」とあるが、あまり情緒的な言葉は使わない方が良いと思う。同様に１６ページ「元気の輪を広げる」も、もう少し地に足の着いた表現を検討していただきたい。

岡﨑座長：全体のバランスもある。中高校生が読むことも考えたのではないか。第５章はいかがか。

（意見無し）

岡﨑座長：それでは、別紙の「めざすべき姿」の案についてはいかがか。
この中の言葉を入れ替えてもいい。案が１から３となっている順番の意味は。

事務局：整理した順番。

岡﨑座長：“愉しむ”という字の背景はなんとなくわかる。

町長：みんな幸せだといいというキャッチコピーだ。言葉のインパクトでは第３案かと思う。

朝倉委員：第３案は北海道のイメージに繋がる。

副町長：小国は“でっかい”が、面積では鶴岡に負けてしまった。

町長：真鶴町は面積が小国の１００分の１、７平方キロメートルしかないが、人口は同じくらいなので、施策がすぐに響く。

副町長：この部分は検討し、先生方に意見をいただくことにしたい。

事務局：有識者会議としては今回が最終となるが、岡﨑先生に相談させていただき、一定の案にしたい。よろしくお願いしたい。